

討した。

【結果】管腔臓器損傷 (n = 47) : 腸間膜損傷 23 例, 胃・十二指腸損傷 6 例, 小腸損傷 12 例, 大腸損傷 6 例. 術式は, 腸切除 25 例, 止血術 13 例, 穿孔部閉鎖 7 例. 他の 2 例は腸間膜血腫で経過観察された. 死亡例は 2 例 (十二指腸 1, 腸間膜 1) だった. 多発外傷合併は 5 例で, 死亡例はなかった. 実質臓器損傷 (n = 81) : 肝損傷 47 例, 脾損傷 23 例, 腎損傷 13 例, 膵損傷 6 例. 肝損傷 47 例中 22 例に IVR が施行され, 8 例は止血困難で手術を要し, うち 2 例は死亡した. 脾損傷 23 例中 10 例に IVR が, 2 例に手術が施行され, 止血困難例はなかった. 膵損傷は 6 例で手術を要し死亡例は 1 例だった. 多発外傷合併は 19 例で, 死亡率 5.3 % だった.

【結語】1. 管腔臓器損傷は, 手術を第一選択とすべきで, 成績は良好だった. 2. 肝・脾損傷は IVR が有効であるが, 無効の場合早期の手術が必要である.

第 93 回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成 23 年 6 月 18 日 (土)
午後 2 時 30 分～6 時

会場 チサンホテル&コンファレンス
センター新潟

I. 一般演題

1 TSH 分泌異常症の 1 例

篠崎 洋¹⁾²⁾・鴨井 久司¹⁾³⁾

古川 和郎¹⁾²⁾・金子 兼三¹⁾

佐藤 幸示⁴⁾・山田 正三⁵⁾

中村 浩淑⁶⁾

長岡赤十字病院糖尿病
内分泌代謝センター¹⁾

新潟大学医学部内分泌代謝科²⁾

新潟県立大学健康栄養学科³⁾

県立小出病院⁴⁾

虎の門病院間脳下垂体外科⁵⁾

浜松医科大学第二内科⁶⁾

症例は 53 歳, 女性. 2007 年より息苦しさ, 倦怠感を主訴に近医受診. 甲状腺機能の異常を指摘され, チアマジールの内服が開始となる. 増量されるも症状の改善がなく, 2009 年 7 月内服中止となった. 2010 年 8 月頃より, 症状がより顕著となり, 精査の結果 MRI 検査で下垂体に腫瘤を指摘され, TSH 産生腫瘍の疑いで精査目的で入院となった.

TSH 1.07 μ U/ml, FT3 3.87 ng/dl と TSH の不適切分泌を認めたが, TRH 負荷試験, T3 負荷試験の結果から TSH 産生腫瘍は否定的と考えられた. 患者の同意を得て甲状腺ホルモン受容体 (TR) の遺伝子検索をしたところ, TR β に遺伝子変異が確認され, 甲状腺ホルモン不応症 (下垂体型) と診断した.

TSH 分泌異常症には, 下垂体に何らかの病変を認めることが多いと考えられ, その病的意義の解釈に注意が必要である. 本症例では現在プロプラノロールで経過をみているが, 今後 TRIAC の使

用も検討している。しかし、その取り扱いに一定の見解はなく、症例の蓄積が必要である。

2 胃憩室による偽副腎腫瘍の1例

宗田 聡・石澤 正博・山田 貴徳
新潟市民病院内分泌代謝科

症例は68歳、男性。胸部CT撮影した際に偶発的に左副腎腫瘍(16.7mm)を認めた。診断目的に当科を受診した。

【身体所見】BMI 24.5, 血圧 110/60 mmHg. 浮腫, 満月様顔貌などは認めない。

【経過】cortisol 11.5 μg/dl, ACTH 27.6 pg/ml, メタネフリン 0.08 mg/day, ノルメタネフリン 0.24 mg/day, PAC 52.8 pg/ml, PRA 0.9 ng/ml/hr, デキサメタゾン 1mg 抑制試験では cortisol 0.79 μg/dl. 以上の結果から非機能性副腎腫瘍と診断した。1年後再検査したCT画像で左副腎と思われた腫瘍の内部に air density が認められ、胃との連続性が疑われた。胃X線検査を施行したところ、胃穹隆部小弯後壁に憩室を認め、胃憩室による偽副腎腫瘍と診断した。

【考案】胃憩室の発生頻度は0.03～0.3%と低く、副腎腫瘍との鑑別が問題となることは稀である。不必要な手術のリスクを避けるべく、左副腎腫瘍の診断の際には胃憩室に注意を払うべきである。

3 当院における腹腔鏡下副腎摘除術：20年間の統計

信下 智広・鳥羽 智貴・笠原 隆
新井 啓・西山 勉・高橋 公太
新潟大学医歯学総合病院
腎泌尿器科病態学部門

【目的】当院は1992年1月に世界で初めて腹腔鏡下副腎摘除術を施行した施設である。この20年間における、世界での初症例から現在までの症例を報告する。

【対象と方法】1992年1月から2010年7月の間に腹腔鏡下副腎摘除術を施行した209例を対

象とした。男女比は87:123。年齢は平均51.0歳(12～81歳)。右102例, 左86例, 両側21例(一期的手術1例, 二期的手術5例, 片側のみの手術9例)であった。原発性アルドステロン症82例, Cushing症候群43例, 褐色細胞腫31例(悪性褐色細胞腫3例), 副腎癌3例, ACTH産生腫瘍6例, ACTH非依存性大結節副腎皮質過形成5例, テストステロン産生腫瘍1例, 非機能腫瘍39例であった。

【結果】手術時間の平均192.6分(64～572分)。出血量の中央値は50 ml(小量～3,740 ml)。経腹膜到達法24例, 後腹膜到達法186例。合併症として500 ml以上の出血13例, 肝損傷1例, 脾損傷1例, 脾損傷1例, 小腸損傷1例, 術後洞停止1例, 皮下気腫1例を認めた。

【結語】当院での20年間で行った209例の腹腔鏡下副腎摘除術の手術統計を考察した。

4 女性化乳房の精査でみつかったアンドロゲン不応症の1例

鈴木 亮・本間 丈成*・佐藤 英利
小川 洋平・長崎 啓祐・菊池 透
新潟大学医歯学総合病院小児科
下越病院小児科*

女性化乳房は良性的乳腺組織の増生からなり、思春期男児の約6割で見られる生理的な現象であるが、時に基礎疾患を有していることがある。今回我々は、アンドロゲン不応が示唆された思春期女性化乳房の1例を経験した。

症状の遷延や家族歴を有する女性化乳房では、基礎疾患の有無について精査が必要である。

5 43年間放置されていた特発性中枢性尿崩症の1例

鈴木 克典
済生会新潟第二病院代謝・内分泌内科

症例は61歳、女性。主訴は口渇, 多飲, 多尿。

【現病歴】生来健康。1969年(20歳時), 口渇, 多飲, 多尿を主訴に岐阜県某総合病院を受診。